

ふくろうのつぐやき

全体が見えるかね

真壁 伍郎



ふくろうの首は、ぐるっと回ってまうしろも見ることができんだよ。子どもたちにこんなことを話してやると、みんな首をうしろにひねっては、試してみています。やっぱりできないと、あらためてふくろうの首のめぐりと頭の回転の良さに感心しています。

「そうなんだよ、世界がまるごと見えなければね。どうだね、君には、見えるかね」。ふくろうはそうつぶやいています。なるほど、ふくろうは自分にそれができる

だけに、要求することも大きいなと思ってしまうました。まるごと世界を見ようたって、首をどうひねればよいか見当もつきません。そんなわけで、しばらくこのふくろうの言葉は、わたしの心にひっかかったままです。

そんなある日、はっと、これかと思わされたことがありました。

二年生のやす子さんが、覚えてきた詩をいかにも楽しそうに口ずさんでいます。

ソロモン・グランディ

げつように生まれ

かようにせんれい

すいようにけっこんして

もくようにびょうき

きんようにぎとく

どようにしんで

にちようにはかのなか

はいそれまでよ

ソロモン・グランディ

(マザー・グースのうた)

へえ、あなたよく覚えたね、というと、だって面白い

んだもの、と答えます。

この詩にかぎりません。やす子さんは、詩がとても好きで、気に入った詩をどんだん空で覚えてしまいます

だいたい子どもたちは詩が好きです。よくわたしに覚えたい詩を口ずさんでみてくれる子どもがいます。

これほど好きならと、わたしは、ある時、ちょっと面白そうな詩をみんなに読んでやりました。

たいようがおならをしたので

ちきゅうがふつとびました

つきもふつとんだ

ほしもふつとんだ

なにもかもふつとんだ

でもうちゅうじんは

いきていたので

おそうしきをはじめた

どうだね、面白いだろう、と子どもの様子をうかがいました。でも、子どもたちは、うふっと笑うだけ。それ以上なんの反応もありません。それでおしまいでした。その後、文庫の本棚から、この本を借りてゆく子どもほとんどいません。

これは七歳の女の子の詩だそうです。この児童詩集を編んだ人は、この子を大きな詩人だとたたえていました。でも、子どもたちは、そう甘くは評価しません。

この一件、わたしたちの目は確かか、と子どもに問われてるように思いました。たしかに子どもたちは、時にわたしたち大人をはっとさせるような、それこそ詩のような言葉を吐きます。その発想と言葉の面白さは、わたしたちの常識をはずれ、これは天性の詩人かなと思わせることがあります。そのためでしょう、子どもたちの

こうした言葉をよせ集めた詩集が少なからず出ています。

でもこの点は、子どもたちのほうがずっと冷静です。子どもが子どもらしく見たり感じたりするのは、子どもにとってはごくあたりまえのこと。それを大人が、むやみにほめたり、感激したりしても、なんのことなのか、戸惑うだけのことでしょう。

なぜか、子どもの作った詩を集めた詩集よりも、いわゆる詩人たちが作った詩集のほうが子どもたちにはずっといいようです。いまでも北原白秋の詩集『からたちの花がさいたよ』が借りてゆかれ、谷川俊太郎の『ことばあそびうた』、まど・みちおの『てんぶらびりびり』、そして最近では、くどうなおこの『のはらうた』などがよく子どもたちどうしの間で手渡されています。

文庫のおじさんが、調子よく読んでやったりするせいもあるのでしょう。響きのいい言葉や、歯切れよくすかっときまった言いまわしには、どの子どもとても喜んでし

まいます。まど・みちおの「がいらいごじてん」も、ずいぶん楽しめました。

ファッション Ⅱ はつくしよん

パンタロン Ⅱ ばあだろう

ネグリジェ Ⅱ ねぐるしいぜ

マニキュア Ⅱ まぬけや

クロッカス Ⅱ ぼろっかす

トイレ Ⅱ はいれ

こんな響きを楽しめるなんて、やはり詩人のおかげです。最近、詩人たちも単なる童謡の歌詞作りから、言葉で勝負する詩の世界に心が向いてきたのでしょう。さまざまな詩の試みがなされるようになりました。ただ残念なことに、言葉の調子のよさだけをねらったものが多くということ。どれもこれも「ことば遊び」の域を出ていないのではないかと思ってしまう。描きだされ、語られる世界そのものが貧弱なのです。

たった数行の言葉のなかに、人の誕生から死までのことを、あっさりと言い切ったソロモン・グランディの詩の見事さ。やす子さんが、マザーグースに引かれたのも無理はありません。こうしたたぐいの詩が、わたしたちにはまだまだ足りません。

きれいな言葉で、きれいな景色を描写すれば、もう詩になる。月の砂漠を王子と王女が旅をしているとか、菜の花畑に夕陽がさしているとか。大人の感傷の世界を情緒たっぷりにうたいさえすれば、それで詩になると、わたしたち自身が信じこんでいたふしがあります。それが子どもに向うとなると、いっそうその傾向が強調されてしまいます。「かわいい子」にふさわしい「かわいい歌」というわけです。

やす子さんにかぎらず、子どもたちが、好んで読んでいる詩を見ていると、子どもたちが求めているのは、もっとちがうのではないかと思ってしまう。おおげさな言葉でいえば、子どもたちはなにか、自分をめぐる宇宙や、自然がどんなままとまりになっているのかをつかん

でおきたいし、見てみたいのです。

星はどうして空にあんなにたくさん光っているの。風はどこからどうして吹いてくるの。どうして春になると花が咲くの。子どもたちのこんな問いにぶつかると、わたしたちはすぐに、これは科学の目覚めとばかりに、むずかしい理屈でこれを説明しようとしています。でも、子どもたちが求めているのは、そんなものではない。物や人には、それぞれに定まった場所があり、時があり、役割があった。それを目で見えるようにあきらかに示してほしいのです。

季節の変わり目や、また、天気がとてもいい時や悪い時に、わたしはよく季節の移り変わりのことを話します。

どうしてだろうね。ぜんぜん離れているのに、あそこ
の家のさくらも、向いの家のさくらも、みんなおんなじ
に咲くじゃない。一・二・三って約束して咲いてるのか
な。

決して、わたしが答えを知っていて、子どもたちの科

学的な興味を引きだすためにそういつているのではあり
ません。わたしの子どもころからの疑問をそのままい
っているだけです。これについての科学的な立派な答え
を、その後、何度聞き、そして学んだことでしょう。で
も、この不思議さについての驚きと疑問は、いまでもわ
たしにはそのまま残っています。

ドイツの子どもの詩を読んでいて、とてもいい詩に出
会いました。

ひとりのかあさんに 四人のこども

はるちゃん、なつちゃん

あぎちゃんに ふゆちゃん

はるちゃん 花をもってきて

なつちゃん クローバをもってくる

あぎちゃん ぶどうをもってきて

ふゆちゃん 雪をもってくる

季節のめぐりと、もたらされる自然の恵みがイメージ

(阪田寛夫「年めぐり」しりとりに唄)

豊かにうたわれています。むずかしい理屈で説明されなくとも、これでなんとなく納得してしまいます。それにこの詩だと、自然が太ったおっかちゃんのような気がして、とても懐しくなります。このなんでもないような詩のたぐいが、自然を愛し、つねに四季をうたうというわたしたちにはあまりないのです。すくなくとも、子どもたちのための、これといった詩がありません。

時の流れを刻む月についても同様です。ありそういで、ないのです。かろうじて、あげるとすれば、こうです。

かるた たこあげ げんきなこ
こけし しもやけ けやきのめ
めだか かげふみ みずすまし
しがつ つみくさ さくらもち

これを、イギリスの女流詩人、クリステイナ・ロセツ
ティの詩でみてみましょう。

寒い一月 荒れた空

二月はすっかり ぬれもよう

三月 風が吹きすさみ

ものかわるは やよいごろ

かわいいこえで鳥はなき

五月の花をほめ歌う

陽のよくつづく六月は

長い長い日ながどき

やけつく暑さの七月に

電光に つんざかれつつ

嵐の雲がとんでいく

八月の野に五こくがみのり

九月の山に果がうれる

天氣の荒れる十月に

地は衣をぬぎすてる

星がながれて落ちるのは

寒いお空の十一月

そして夜長でその上に

寒さのますは

ちりげ冷たい十二月

（『ロセッティ童謡集』大原三八雄訳）

なんとすばらしい詩でしょう。それぞれの月による自然の移り変わりが、短いことばで端的に言い表され、口ずさみながら思わず一年の月日のめぐりを実感してしまいます。さきの詩とくらべてみると、詩の技術うんぬんよりも、見えている世界と、その奥行の深さが、もう当初からちがっているようです。

子どもにそうしたものが向かないと思うから書かないのか、それともわたしたちが一般に、自然や宇宙をうた

うことを、しち面倒くさいこととして避けているのか。フレールベルの「母とおきなごの歌」があきらかにひとつの宇宙観、世界観を意図していたことを、ここでわたしたちは思い起しておく必要があります。

宇宙観や世界観が必要なのは、大人だけではない。もちろん大人にも必要だが、それ以上に子どもたちには必要だ。幼児教育の創始者たちは、みなこのことを深く心にとめていたようです。

あのことを知っている、あれができる、これができる、こまぎれの知識や技能をどんなに集めても、まとまりある宇宙や世界は見えてきません。子どもものころから、できる、できない、知っている、知らないで追いまわされ、安心して身を横たえる宇宙の片隅すら思い浮べることができないとしたら、いったいなんのための教育があったといえるのでしょうか。

今から八百年も昔の一女性の宇宙観、世界観が、いまヨーロッパで話題になり、多くの人の関心を集めています

す。ドイツの尼僧、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンが「見た」という世界です。昨年、そのヒルデガルトの生れ育った場所を訪ねてきました。山の上の、廃墟となった修道院の小さな片隅が、彼女の思想を育んだ場所でした。連なる丘が見え、森や畑に見えかくれしつづつ川が眼下にぶく光って流れていました。空には風におくられた雲がゆっくりと通りすぎてゆきます。いまはもう草が生い茂るだけとなった彼女が寝起きしたという場所の目の前に、修道院を訪ねてくる人のための宿舎「ホスピス」が、これもまた廃墟となって残っていました。

ここで彼女は宇宙の全体像を見、人類救済の歴史を絵巻きもののように見たといえます。彼女はドイツ最初の博物学者であり女医でした。また、詩人でみずからの詩に作曲もしています。国王や聖職者が訪ねてきて教えを乞うたという、哲学、神学の学者でもあったといわれております。

幼いヒルデガルトは、この小さな場所でユッタという女性教師から教えをうけました。その教育がすばらしく

ったといえます。天と地を見はるかす場所で、創造の秩序とその業をたたえる歌を、彼女は習い、うたい始めます。世界はばらばらではない。すべてのものにそれぞれ定まった場所と役割が与えられている。宇宙も、自然も全体が一つとなって、美しいハーモニーをかなでているのだと彼女はいいます。

彼女の残した大部の著作を現代語に訳した医学史の大家、ハイデルベルク大学のシッパゲス教授にお会いしたら、こういっておられました。

「いままでわたしたちは、雑多な知識と技術を追いつめてきました。でもこれをどうまとめることができるか。これは同じ路線のなかからは出てきません。いま、わたしたちに必要なのは、全体への眺望です。これをわたしたちは、八百年前の女性、ヒルデガルトに学ぶのです」。

ヒルデガルトが、幼い時、身をもって「全体への眺望」を与えられたように、いまわたしたちのまわりの子どもたちも、本当はそれを一番求めているのかもしれない

せん。わたしたち大人がもっているという宇宙観、世界観もそのおおよそのスケッチは、どうみても、子どもどころに与えられた「絵」以上に出ていないように思います。これはわたしひとりの思いでしょうか。

ふくろうのいうことがよく分かりました。宇宙や世界が一枚の「絵」になって見えているかどうかということでした。その絵をもつてわたしたちは生きていくことになります。後にいろいろなことを習ったり覚えたりしますが、それは初めの絵を変えるほどのものではありません。ですから問題は、その絵がほんとうに慰めや、安らぎに満ちたものになっているかどうかです。

いい詩ってどんな詩？ それに答えるすてきな詩があります。

Keep a poem in your pocket
and a picture in your head
and you'll never feel lonely

at night when you're in bed.

The little poem will sing to you
the little picture bring to you
a dozen dreams to dance to you
at night when you're in bed.

So —

keep a picture in your pocket
and a poem in your head
and you'll never feel lonely
at night when you're in bed.

もっててごらん ポケットのなかに
小さな 小さな 詩をひとつ
あたまのなかに 絵をひとつ
そうすりゃ ぜったい なびしくない
ベッドのなかで よるねるよきみ

その詩が あなたに うたいかけ

その絵が ゆめを もつてくる

たのしい おどりを おどれるように

ベッドのなかで よるねるときも

ね、だから

もっててごらん ポケットのなかに

小さな 小さな 絵をひとつ

あたまのなかに 詩をひとつ

そうすりゃ ぜったい さびしくない

ベッドのなかで よるねるときも

(ベアトリス・ド・レニエ)

たぐさんの本を著し、現代を代表する神学者といわれたカール・バルトは、亡くなるときまで、子どものころの歌を喜んでうたいつづけたといえます。羊飼が迷った一匹の小羊をさがし、とうとう見つけて、連れ帰ったと

いう内容の歌です。これが、彼を支えた「絵」であり「詩」でした。さて、わたしたちはいま、どんな絵や詩をもつて、今日を生きているのでしょうか。

(新潟医療短大)